

他者理解を深める道德教育の研究 ～ 食育を通して ～

主題設定の理由

本校では、平成19年度から保護者や地域を交えて「食育」を推進してきた。食に関する具体的な体験（地域農家での勤労体験、遠足時の生徒自身による弁当づくり、生産者との交流給食など）を通して、食材や食事を作る人の思いを実感したことが他者理解につながり、勤労の尊さ、感謝の気持ちなどを自分の言葉で素直に表現する生徒が見られるようになってきた。

しかし、一方では、中学生特有の発達段階の課題である他者理解の不足から自己中心的な言動をとり人間関係のトラブルを招く生徒も見られる。

「食」は生活の基盤であり、「食」にかかわる人々について理解することは本質的な他者理解につながると考える。多くの人に助けられながら人が生きているということや、食の安全性の確保や基本的な生命尊重の精神といった「食育」を通しての道德の学習は、生徒の心に響き、自分の生活に生かしやすい学習となると考える。

また、桜島には「桜島小みかん」「桜島大根」という地域ならではの食材もあり、それを守り育ててきた人々の苦労や喜びを知るような学習は身近なものとしてとらえやすく、さまざまな道德的価値の高揚につながるものと考えられる。

そこで、平成20年度～平成21年度の2年間を通して、「道德的価値」をしっかりと視点として取り入れた「食育」を研究することにし主題を設定した。

研究の仮説

- 1 道德的価値を高める視点をはっきりとさせて「食」に関する体験学習を進めることができれば、中学生に必要なより適切な「他者理解」を深められるのではないかと。
- 2 桜島特有の農産物の生産にかかわる道德資料を作成・活用すれば、生徒により身近な「道德」の授業となり、心に響く学習になるのではないかと。

研究方法

1 研究の内容

- (1) 生徒の実態把握・・・生徒が持つ道德的課題について実態を把握する。
 - 意識調査（学習・生活・保健・給食）
 - 体験学習の感想・生活の記録（日記）
 - 日常生活における生徒の言動
- (2) 体験学習・・・道德的価値を高めるための体験活動とするため、事前・事後の学習のねらい・方法について検討し実践する。
 - わくわくお弁当づくり（家族への感謝の気持ち）
 - 「食育」講演会（食育の必要性）
 - 夏休み「朝食チェック」（朝食の大切さと生活リズム）
 - 勤労体験学習（生産者の生き方、思いの理解）
 - ふるさと先生講話（郷土愛）
 - 生産者との交流給食（生産者への感謝の気持ち）
- (3) 読み物資料作成・・・桜島特有の農産物に関する道德資料を作成し、活用する。
 - 桜島大根を守り育てた人たち
 - ギネスに載った桜島小みかん
 - 地域の農業を支えてきたもの
- (4) PTA・地域関係団体との連携
PTA（協力態勢・具体的取組）

その他の団体・機関（協力態勢・地域行事）

(5) 研究のまとめ
生徒の変容
課題

2 研究計画

| 月 | 研究内容 |
|-----------------|---|
| 平成20年度 4月～5月 | <ul style="list-style-type: none">研究の目標とする点の共通理解研究主題の周知、組織作り |
| 6月 | <ul style="list-style-type: none">「食育に関わる講演会」の実施実態調査用紙の検討「わくわくお弁当づくり」の実施（2年生、3年生）実態調査の実施 |
| 7月 | <ul style="list-style-type: none">長期休業中の地域の取組計画確認（依頼） |
| 8月 | <ul style="list-style-type: none">実態調査と課題の検証研究仮説の再検討「朝食カード」の実施「地域の特色を生かした食に関する読み物資料」の作成 |
| 9月 | <ul style="list-style-type: none">「勤労体験活動」の実施（1年生） |
| 10月 | <ul style="list-style-type: none">「地域の特色を生かした食に関する読み物資料」を生かした研究授業と授業研究（講師招聘） |
| 11月 | <ul style="list-style-type: none">「ふるさと先生講話」の実施「わくわくお弁当づくり」の実施（1年生） |
| 12月 | <ul style="list-style-type: none">実態調査と生徒の変容の分析 |
| 1月～2月 | <ul style="list-style-type: none">「生産者との交流給食」の実施1年目の研究のまとめと次年度への課題の明確化中間報告冊子作成 |
| 3月 | <ul style="list-style-type: none">次年度の研究計画作成 |

研究の実際

1 生徒の実態把握と課題の検証

本校の全生徒を対象とした調査（平成20年7月）の結果、以下のような実態が明らかになった。

学力と朝食の関係

- 朝食を「きちんと摂る」生徒と「あまり摂らない」生徒のテスト結果を比較すると、「きちんと摂る」生徒のほうが高い。

家族が揃って食事をする事

- 「悩みを家族に相談する」生徒の多くが、一日1回は家族全員が揃って食事を摂っているが、悩みがあっても家族には相談しない生徒の家庭では、家族が揃って食事をしないことが多い。

これらの結果から、「食事」をはじめとした基本的な生活がきちんとできることは、学力向上の基盤となり、「食生活」を中心とした基本的生活を確立することが、将来、自立できる子どもの育成につながっていくのではないかと考えた。また、日頃から家族で食事を摂り、語り合える雰囲気がある家庭では、子どもは親に悩みをうち明け、子どもが自分の悩みを解決するために親との対話を重ねることで、正しい判断力の育成につながっていくのではないかと考えた。

2 家庭や地域を生かした体験学習・・・道徳的価値を高めるための体験活動とするため、事前・事後の学習のねらい・方法について検討し実践する。

(1) 地域の特産物製造体験(2年生)

- ・ 食品づくりに寄せる地元の方々の思いや姿から、多くのことを学ぶことができた。

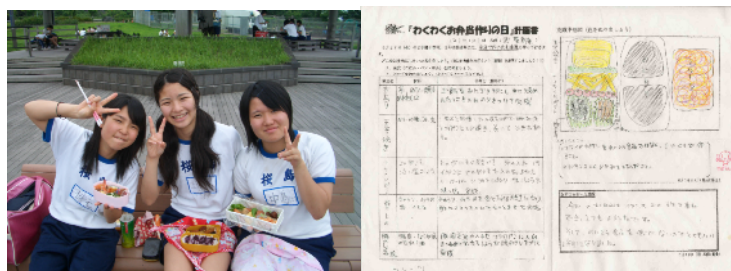


(2) 地域の農家で農業体験(1年生)



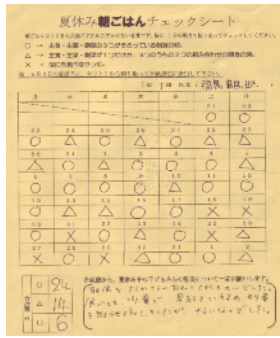
(3) 「わくわくお弁当づくり」(全学年)

- ・ 遠足などの行事に自分で作ったお弁当を持っていく取組で、計画・準備・調理のすべてを自分で行わなければならないことから、日頃の食事づくりがいかに大変であるかを知り、親に対する感謝の気持ちを表す生徒がたくさん見られた。



(4) 夏休み「朝食チェック」(全学年)

- ・ 夏休み前に「朝食チェック」用紙を各家庭に配布し、バランス良く朝食を摂取できたかどうかを点検する取組で、2学期始業時に回収、分析を行い、学力との関連等をさぐるために活用した。



(5) 生産者との交流(全学年:今年度も2月に実施予定)

- ・ 地元の食材を使った給食を実施する2月に、食材を提供する生産者を学校に招き、会食をする取組。農業の楽しみや苦労話などを交えての食事は、いつもの給食がさらに味わい深いものになった。



3 郷土を生かした読み物資料の作成と活用

(1) 桜島特有の特産物にかかわる読み物資料の作成

「道徳の時間」の学習を、生徒にとってより身近で心に響くものにするために、郷土を生かした読み物資料を作成・活用したいと考えた。そこで、「食育」活動と関連付けた総合単元的な道徳教育を展開していくために、桜島特有の桜島小みかん・桜島大根等の生産にかかわる道徳資料を作成した。

(2) 読み物資料の例

『桜島の農業をささえる地元企業・旬彩館』

桜島の噴火活動が激しかった昭和40年代から50年代、桜島の農家では、降灰による被害が深刻な問題になっていました。降灰で覆われたハウスは押しつぶされたり、光が十分にハウスの中に入らなかったりしました。何とか実った小みかんは、糖度が低く、形や色も悪く、皮の表面は灰でよごれていました。ほうれん草や山東菜といった軟弱野菜の出来も最悪でした。「こんなものは誰もかわない」と、桜島産のものは市場でも相手にしてもらえませんでした。こうして、毎年、大量の農作物が売れ残り、処分されていたのです。売れないものをいくら作っても生計は立てられないと、農業を捨ててしまう人や、別の仕事を求めて桜島を離れなければならない人まで出てきました。

そのような状況のなか、農家の主婦たちが集まり、商品としての価値がなくなった農作物で何か新しい加工食品を作ることができないだろうかと考えはじめました。これが、のちの「旬彩館」の前身である、「生活改善グループ」の誕生(1980年)です。彼女たちの取組は、商品価値を失い処分せざるを得なかった農作物を何としても再生したい、という願いからスタートしました。

間引きされたほうれん草は、ゆでてペースト状にし、きれいな緑色のふくれ菓子になりました。皮が黒くよごれたものや大きく育ちすぎて小さくない小みかんなどは、皮と実に分け、皮は料理やお菓子のスパイスに、実はジュースに生まれ変わりました。また、小みかんを丸

ごと砂糖で煮た「小みかんグラッセ」は、のちに農林水産省が主催した「2007年度食アメニティー・コンテスト」で「農村振興局長賞」を受賞するヒット商品になります。グラッ

道徳指導案（2年生「郷土学習」事前道徳）

| | | |
|---------------------------------------|--|--|
| 資料名 | 自作資料『桜島の農業をささえる地元企業「旬彩館」』 | |
| 内容項目 | 4 - (7) 郷土愛 | |
| ねらい | 1 「郷土学習」の事前授業であることをふまえ、「旬彩館」の事業内容や「旬彩館」が誕生した経緯を知る。 2 「旬彩館」で働く人々の郷土に対する思いや願いを知り、積極的に「郷土学習」に参加しようとする意欲や態度を培う。 | |
| | 教師のはたらきかけ・支援 | 主な発問 |
| 1 これまでの「食育」活動をふりかえる | ・ 「農業体験学習」「わくわくお弁当」の画像を提示することで、活動時の気持ちを思い出せるようにする。 | ・ 農業体験学習やわくわくお弁当作りで、学んだり感じたりしたことは何ですか。 |
| 2 「旬彩館」について知っていること発表する。 | (めあて)「旬彩館」で働く方々の思いや願いについて考えよう。 小みかんや大根を加工して販売する企業だな。 | ・ 「旬彩館」について知っていることは何ですか。 ・ 「旬彩館」で働く方々はどのような気もちで仕事をしていると思いますか。 |
| 3 資料を読んで、「旬彩館」が生まれた経緯を確認する。 | ・ 資料を通して「旬彩館」が生まれた経緯を理解させる。 降灰被害で商品価値を失った桜島の農産物に付加価値をつけようと、農家主婦たちが集まって研究した。 | ・ 「旬彩館」の前身である「生活改善グループ」は、どのような経緯で誕生したのが確認しましょう。 |
| 4 商品開発に取り組んだ彼女たちの郷土に対する思いに気付く。 | 主婦たちの、衰退していく桜島の農業を何とか活気づけたいという願いや、災害に負けない強さ、地元の食材を守っていこうとする郷土愛に気づかせる。 | (中心発問1)「商品価値を失い処分せざるを得なかった農作物」を何としても再生したいと考えたのはなぜですか。 |
| 5 「郷土学習」に参加するにあたり、どのような心構えが大切であるか考える。 | ・ 6月に実施する旬彩館での「郷土学習」に、積極的に参加しようとする意欲化をうながす。 貴重な機会に感謝して礼儀正しく。 衛生面に細心の注意を払って。 桜島のすばらしさを実感しながら。 | (中心発問2) どのような心構えで「郷土学習」に参加したいですか。 |
| 6 教師の説話を聞いて、旬彩館で働く方々の夢や願いを知る。 | 旬彩館のモットーは「人づくり・町づくり」。旬彩館のがんばり(売上増加や商品開発)が、島民の絆づくりや農業の活性化に貢献できるとい願いをもち、日々生き甲斐を感じながら働いていることを伝える。 | ・ 旬彩館の従業員の方々は、どのような夢や願いをもっていると思いますか。 |

セを作るときに出る煮汁は、小みかんの風味がたっぷりつまった万能だれになりました。

1995年、生活改善グループは「旬彩館」と名を改め、さらに2004年に有限会社となりました。現在は、地元の女性・約20名が勤務していて、加工食品製造のほか、「火の島レストラン」の経営、地域の行事にも積極的に参加しています。

旬彩館は、桜島の特産品である小みかんや桜島大根などを使い、新しい特産品を製造・販売する企業です。地元の生産者の立場を第一に考え、地元の食材を無駄なく活用し、桜島が誇るすばらしい自然の恵みを県内外に広め、桜島の活性化を目指しています。

以前、社長の中島さんは、南日本新聞社のインタビューに次のように答えています。

「笑いが絶えず、楽しく仕事をしたい。若く新しい感覚を身につけ、新商品を開発していきたい。雇用の面でも、地域に貢献し、生きがいになればいい。」

(3) 読み物資料を活用した「道徳の時間」の授業例

(4) 生徒の感想

旬彩館はどうしてできたとか、農家の方々の思いとか、知らなかったことを知ることができた。桜島に誇りをもってすごしていきたいと思った。

今みたいに昔も桜島をうれしがって食べていたのかなと思っていたけど、実際は変な目で見られていて、そんな過去があったんだと思っていたけど、主婦の人達が、そんな状況を救ったんだなぁと思ったら、本当にすごいと思ったし、賞まで取っているのがんばったんだなぁと授業を通して思いました。

旬彩館について少しは知っていたけど、もっとくわしく知ることができて良かったです。それに改めて桜島の農作物の良さも考えることができました。2年の6月に旬彩館に作りにいくときは、一生懸命取り組みたいです。

4 PTA・地域関係団体との連携

PTAでも以下のような重点目標を掲げ、意識した取組を実施している。

家庭における「食育」の重要性を再認識し、生活のリズムを整えて、バランスの良い食事をきちんと摂ることや、食卓を囲んでその日のできごとを家族で話し合う場を充実する。



成果と課題

「食育」と関連をもたせた体験活動の成果として、以下のことが挙げられる。

食育への関心が高まったことで、家庭における基本的な生活が確立・向上していること。

「食」を通して地域の方々と触れ合いが増え、中学生が地域で育つという意識の高揚につながっているということ。

子どもたちが「食」の大切さを認識、「食」を通して自分のことだけでなく他者を理解したり感謝したりする気持ちが育ちつつあること。

今後も、学校と家庭、地域が一体となって「子どもたちを育てる」視点をもって、基本的な生活、なかでも「食」に取り組み、子どもたちの「心」の安定につながり、ひいては学力向上や、何事にも意欲的に取り組むことができる生徒を育てていきたい。

今後の課題としては、「食」を通じた道徳教育と「道徳の時間」との関連付けや、郷土を生かした読み物教材の開発と活用に関する実践をさらに推進していくこと等が挙げられる。